校長のたわいもない独り言：再び

つぶやきⅢ

令和３年８月27日（金）第36号
発行人

コロナ禍であっても”つぶやき”は極力続けます・・の川崎先生。

★コロナ禍でなにができるかを考える★

新型コロナウイルスのデルタ株が猛威を振るっている。感染力が強いとされるこのウイルスに対して、人間として学校として、どのように対応していくのかをより深く、より真剣に考えていく必要がある。

これを書いている時点での山梨の感染者数は、多い日で一日あたり 100 人を超えた。数字的にもかなり多くなっていることがわかるが、人口 10 万人あたりに換算すると国内でも上位に来てしまう。第１波～第４波までとは比較にならないくらい感染者は爆発的に増えている。この結果、山梨県でも病院の空きベッド数が減少し、重症化しても入院できない状況となっている。まさに危機的状況である。

もちろんこのような状況の中、学校もこれまで以上に様々な対応が必要となる。9/12 まで山梨（南アルプス市）は蔓延防止等重点措置地区に指定された。

①この期間の学校は分散登校（半分の人数ずつ登校）となる。（8/30 より）
②この期間に含まれる学園祭は延期を余儀なくされる。
③修学旅行も時期や内容も含めた検討が必要となる。
④「学び合い」も「クッシータイム」もしばらくは出来なくなる。
⑤部活動も活動内容や活動時間が大幅に制限される。
⑥給食も配膳に時間がかからないように品数が少ない給食となる。

残念だが、多くの制限が課せられることは避けられない。学校で、もしも集団感染（クラスター）が発生した場合には、あらゆる方面に与える影響は計り知れないほど大きいからだ。

極論を言ってしまえば、誰も一歩も外に出ず、家族と室内にいることが一番感染を防ぐ確実な方法である。しかし、現実的にそれは不可能だ。大人は生きるために、人を生かすために働かなくてはならないからだ。中学生を含めた子どもは、ずっと室内で生活することも不可能ではない。しかし、そうなった場合の精神的圧迫はかなり大きなものだろう。となれば、どれだけリスクを減らして活動できるかが大切となる。

夏休みには、郊外をランニングしている生徒に数多く出会った。自分の体と対話して出来ることに取り組んでいる姿はさすが！だ。集団で活動できない時には、これも一つの方法だろう。何もできないと悔やむより、リスク管理をして“何ができるか”を考える。これが感染が収束するまでのコロナ禍の過ごし方なのだと思う。

★最も大切なことは「一人一人の意識」である★

日本には「のど元過ぎれば熱さ忘れる」ということわざがあるように、過ぎてしまったこと、慣れてしまったことについて鈍感になると言われる。なんとなく大丈夫だろうという、根拠のない安心が一番コワい。自分だけでなく、自分の周りの大切な人も含めて、誰一人として不幸な目に合わないように、一人一人の行動が今問われているのだ。

◎遅ればせながら◎

聖火ランナーへの応援メッセージが 8/24 に届きました。メッセージをくださった保護者の皆様、心温まる言葉をありがとうございました<m(__)m>。読み返して感激してます（涙）